

神戸の技術ベンチャー「シンクチューブ」

今年1月。九州のある離島で住民がインターネットを高速通信で楽しめるようになった。携帯電話も通じにくく、これまででは有線電話の回線を使うしかなかった。新たに無線LANのアクセスポイントとなる基地局を建

設したわけでも海底に光ファイバーケーブルを通したわけでもない。通信を可能にしたのは神戸市東灘区のベンチャー企業「シンクチューブ」が開発した新通信技術「無線メッシュ・ネットワーク」だ。【協田顕辞、写真も】

シンクチューブ 研究開発に力を入れ、7人の社員のうち5人は研究開発員。ペル一人とオーストリア人研究者もおり、「技術開発に国境はない」（海藻社長）という。無線メッシュ・ネットワークに関する2件の特許を持ち、05年にはユビキタス社会実現に向けて貢献したとして、財団法人「関西情報・産業活性化センター」の会長表彰を受けた。06年度売上高は7800万円です。

フラが破壊された際の補完機能として公衆無線LANサービス地域を作る試みや、災害現場でのレスキューロボットの制御範囲を拡大する研究も進む。海藻敬之社長(46)は日本IBMで勤務した後、米国の大学院留学を経て01年に事業を始めた。兵庫県出身の海藻社長は、米シリコンバレーでの研究やビジネスを見た経験から「市場である東京に会社を置く必要はない。東京から離れ、腰を落ち着けて研究開発をしよう」と神戸を選んだ。

小型端末が開く情報網

複数の小型通信端末

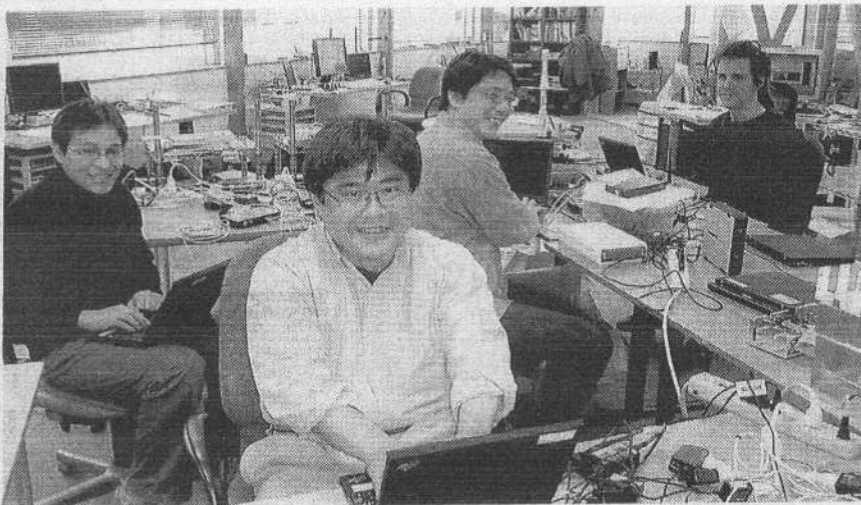
が互いに情報を伝え合い、網の目のようにネットワークを作るため、大規模な基地局を設置する必要がない。この離島には、対岸からの電波を受信する拠点の端末のほか、島内に複数の小型端末を設置し、ネットワークを

形成している。

端末自身が周囲に誰がいるかを瞬時に判断し、カーナビが目的地までの最短ルートを決断するように最適な情報伝達ルートを見つけてくる。このため、電波状態が変化したり、端末が位置を変えても安定的に通信を維持できるほか、新たな端末の追加も自在だ。

大阪市が進めている防犯機能付き自動販売機で通学路の子どもを見守る事業では、子どもたちのランドセルに付けたICタグの情報を利用して利用される。親は、子どもたちが学校を出たことを携帯電話あてのメールで知り、どの地点をいつ通過したかも携帯電話で分かる仕組みだ。

現在では実験的な取り組みが多いが、海藻社長は「基盤となるネットワーク技術を別の機器と組み合わせることで大きく可能性は広がる」として他企業と連携することで事業化を図ろうとしている。実現すれば、時や場所を問わずに情報ネットワークに接続できる「ユビキタス社会」の実現にも貢献できるという。「小さな組織でも頑張ればやりがいのある仕事はできる。一人一人の社員が力をつける



「新たな価値を生み出せる会社になりたい」と話すシンクチューブの海藻敬之社長。神戸市東灘区の本社で

大規模設備投資不要「無線メッシュ」

災害時インフラ補完も

挑

流

離島での試みは実験段階だが、他にも多様な場面で技術が活用され始めた。

四国の造船所では、大型船舶の引き渡し前の検査で、スクリーンなどの計器のデータを生かされている。これまでは

ほかに、災害で通信インフラが破壊された際の補完機能として公衆無線LANサービス地域を作る試みや、災害現場でのレスキューロボットの制御範囲を拡大する研究も進む。

大型船舶の引き渡し前の検査で、スクリーンなどの計器のデータを生かされている。これまでは

ほかに、災害で通信インフラが破壊された際の補完機能として公衆無線LANサービス地域を作る試みや、災害現場でのレスキューロボットの制御範囲を拡大する研究も進む。

ほかに、災害で通信インフラが破壊された際の補完機能として公衆無線LANサービス地域を作る試みや、災害現場でのレスキューロボットの制御範囲を拡大する研究も進む。